

12 高麗寺跡

相模郡山城町

京都府南部の相模郡の地域には、かなり早い時代から、古代朝鮮の高句麗系の人びとが数多く居住していました。現在の地名にも山城町の上狛、精華町の下狛など、高句麗ゆかりの大字が存在するのも、けっして偶然ではありません。

平安時代の中期にまとめられた『和名類聚抄』は、わが国現伝最古の分類百科事典ともいふべき書物ですが、そのなかにも山城国相模郡の犬狛郷や下狛郷が明記されています。また天平の高僧行基のことを記しました『行基年譜』には、「相模郡高麗里」とみえます。

『日本書紀』の欽明天皇三十一年（五七〇年）七月の条には、越（北陸）に上陸して近江から大和へ入った高句麗使節を応接するための館（迎賓館）が、相模の地域に造営されたことが述べられています。相模郡のあたりは、対外交渉につながる要地であったことがわかります。

こうした史実を反映する古寺が、山城町上狛の高麗寺です。高麗寺のことは、平安時代のはじめに奈良薬師寺の景戒によって書かれた『日本霊異記』にもでてきます。高麗寺の僧榮常の説話がそれです。

この高麗寺の存在が改めて注目されるようになりましたのは、

昭和九年（一九三四年）のころからです。地元の郷土史家の中津川保一さんが多数の古瓦や建築金具などを蒐集して、高麗寺の調査にとりこんでおられました。それをうけて、昭和十三年（一九三八年）に試掘調査が行なわれ、さらに京都府史蹟地保存委員会によって本格的な発掘調査が実施されました。国の史跡に指定されている高麗寺跡の全貌は、こうした多くの人びとの努力によって、しだいに明らかになりました。

昭和五十八年（一九八三年）からは五カ年計画で、ふたたび高麗寺の発掘調査が継続されました。南側の二つの土壇は瓦積基壇で、右側に塔跡・左側に金堂跡、その中央の奥に講堂跡がある、いわゆる法起寺式伽藍配置であることが判明し、昭和十三年の調査で明らかとなった塔の心礎には、心礎の横に舍利を納める孔が穿たれたきわめて珍しいものであることもたしかになりました。その後の心礎の調査にその検出は大きく寄与することとなります。さらに回廊跡や瓦の窯跡などもたしかめられ、風鐙の鑄型や観音菩薩を線刻した瓦、かざり石、かざり金具などが出土しました。

高麗寺跡は古代における善隣友好のあかしのひとつで、山城の栄光のいにしえを物語っています。

（上田正昭）



山城町上狛高麗寺跡

✕モ●白鳳時代に本格的な造営がなされた高麗寺は、山城町上狛集落の東、木津町を南にみはらす台地上にあります。国道24号から木津川上流に向かって国道163号に入った左手です。JR奈良線上狛駅下車。